

第97号

# 研究所報



三好教育研究所  
平成28年度

## あ い さ つ

第97号「三好教育研究所 所報」の発行にあたり、ごあいさつを申し上げます。

本年度は、平成24年度より取り組んで参りました研究主題「未来を切り拓き、心豊かにたくましく生きる子どもの育成」の5年目、最終年度となりました。本年も幼稚園、小学校、中学校から7名の先生方が主題のもとに研究された実践のまとめを寄せてくださいました。

その研究内容をご紹介します。他との交流をとおして自他を尊重し支え合える子どもを育てる人権教育の取り組み、言語能力の育成をめざした国語科教育の実践、基礎的な英語力を身につけるための毎時間の積み重ねやご自身の体験を子どもたちの意欲づけに取り入れた英語授業です。その実践は工夫を凝らし、指導効果を繰り返し検証しながら目標達成に向けて取り組まれた、非常に興味深く素晴らしい研究となっています。ここに収録された研究実践報告が、各園、学校現場での教育活動に参考になり、生かされることを願っております。

さて、三好地域の学校の現状を見てみますと、教員の年齢層に大きな偏りがあります。年代別に見てみますと、50代の先生方が57.4%、40代17.8%、30代15.4%、そして20代の先生方は9.4%となっています。（平成28年4月1日現在）今後5年間に50代の経験豊富な先生方は減少し、若い世代の割合が増えてくることが予想されます。これからの教育を担われる若い先生方には、忙しさに流されることなく、自ら主題をもって研究を深めることで教育専門職としての自信を培い、子どもたちを教導くことに一意専心されることを願っております。

最後になりましたが、三好教育研究所の諸事業に対し、ご理解とご協力をいただきました関係機関の皆様にご心より感謝を申し上げます。今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年3月

三好教育研究所長 吉田美千代

# 目 次

あいさつ

三好教育研究所 所長 吉田 美千代

## ———— 委嘱研究員研究 ————

- たくましい心と体を育てる幼稚園教育をめざして……………1  
～小学校との交流や食育指導を通して～  
辻幼稚園 教諭 加藤 由美
  
- 実生活に生きて働く言語能力を育成する国語科学習指導……………4  
～書く活動を通して，自ら考え，豊かに表現する子どもの育成～  
三庄小学校 教諭 木村 麻紀子
  
- 自他を大切にし，共に生きる力を育む人権教育の創造……………8  
～他との豊かなかかわりを通して学び合い，支え合う児童の育成～  
芝生小学校 教諭 玉木 恵子
  
- 友達のおさを見つけることができる児童の育成をめざして……………12  
～道徳（人権）「ともだち」の学習を通して～  
池田小学校 教諭 上浦 大輔
  
- 言語能力に培う教育活動……………15  
～一次的事ことばの充実と二次的事ことばの獲得を目指して～  
政友小学校 教諭 瀧下 光子
  
- 生徒の海外生活や異文化への興味・関心を高めるために……………18  
～若手教員米国派遣交流事業参加の成果を活用して～  
三好中学校 教諭 石崎 雄一
  
- 基礎・基本を定着させる英語教育の実践……………21  
三野中学校 教諭 石橋 洋平
  
- 平成28年度 三好教育研究所事業報告 ……………24
  
- 歴代委嘱研究員一覧（平成元年～）

## 研究主題

たくましい心と体を育てる幼稚園教育をめざして  
～小学校との交流や食育指導を通して～

辻幼稚園 教諭 加藤 由美

### 1 はじめに

本園は、平成28年度、4歳児11名、5歳児10名、計21名の園児が在籍し、毎日元気に園生活を送っている。今年度、私は、4歳児11名（男児5名、女児6名）の担任をしているが、半数が家庭からの入園であるため、幼児が安心して園生活を過ごせるように、一人一人の気持ちにいてねいに寄り添う保育を心がけてきた。

また、平成27・28年度には、徳島県教育委員会指定幼稚園人権教育研究発表会の会場園となり人権教育の研究に取り組むことになった。研究主題を「豊かなかかわりを通して、共に支え合い、たくましく生きる子どもを育てる人権教育の創造」～自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めることのできる子どもの育成～とし、人権教育を推進する視点を「なかまづくり」「豊かな感性」「たくましい心と体」の3つに定め、それぞれの視点の中で、育てる園児の姿を明確にし、研究に取り組み、本年度、研究発表会を開催することができた。

### 2 研究の目的

幼児期は、生活全体を通して、幼児が周りに存在するあらゆる環境からの刺激を受け止め、自ら興味をもって環境にかかわることにより、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験が必要である。しかし、近年、核家族、共働き家庭の増加により、様々な人との関わりが少なくなってきたと感じられる。自分の思いを相手に伝えることが苦手な幼児や基本的な生活習慣の定着が十分でなく、家庭との細かな連携が必要な幼児もいる。

そこで、このような本園児童の実態をふまえ、他園や小学校、地域の方々との豊かなかかわりの中で他者の存在に気付き、相手を尊重して行動ができ、友達と一緒に体を動かす心地よさを体感できる幼児を育てること。さらには、食に関心を持ち、食べる喜びや楽しさを味わい、健康に生活できる幼児を育てることを、研究の目的として取り組むことにした。

### 3 研究の方法

次の2つの視点をふまえ、幼児の日々の記録をもとに研究を進めていく。

- ① 幼児一人一人の思いを受け止めながら、自分の思いを相手に伝えたり、相手の思いに気付くように援助していく。（小学校との交流を通して）
- ② 家庭との連携を深めながら、幼児の生活実態を共通理解し、保育をすすめる。（食育指導を通して）

### 4 実践と考察

<事例1> 「ありがとう」 7月上旬

「なに折ろうかな？」Aさんに優しく問いかける小学生。「よう飛ぶひこうき教えて」Aさんは、赤色の折り紙を取り出す。「ぼくも教えて」Bさんもそばへ寄ってくる。Cさんは、じっと友達の様子を見ていた。「Cさんも教えてもらおう？楽しいよ」教師は声

かけをする。それを聞いた5年生が「一緒に折ろう」と誘ってくれた。Cさんは折り紙を取り出す。「まず、三角に折って」「そうそう上手に折れる」「次は、折り紙を広げて真ん中の線のところまで折るよ」隣のAさんが「これでいいん？」と積極的に小学生に問いかけている。Cさんは、小学生に小さな声で、「このところむずかしい」と伝えていた。紙ひこうきが完成するとCさんは、小学生に「ありがとう」と言った。教師は「Cさん、よかったね」と声をかける。作った紙ひこうきは、よく飛び、とてもうれしそうだった。幼児たちもそれぞれ飛ばし始める。「あれ。あんまり飛ばんなあ」「かるく飛ばしてみて」小学生とそんなやりとりをしている。そして、小学生も同じように飛ばしてみる。Cさんも友達と一緒に紙ひこうきを飛ばし競い合っていた。

#### 【省察】

本年度から年間を通じて全学年の小学生と交流をしている。今回は、2回目の5年生との「折り紙遊び」交流会を実施した。幼児は朝から落ち着かない様子ではあるが、とても楽しみに待っていた。

そんな中でCさんは、日頃から自分の思いを相手にうまく伝えることができず遊びの中で悲しい思いをすることが多かった。この日も緊張した様子のCさんを教師は、紙ひこうきづくりに誘ってみる。



いつもCさんは、業間にサッカーなどをして遊んでいる小学生の姿を、うれしそうに見ているが、実際に身近に接して話をすることは、自分の方からはできなかった。最初、うまく飛ばなかった紙ひこうきも小学生は飛ばせることができ、小学生のテクニックに幼児たちは驚いていた。Cさんも小学生に教えてもらった紙ひこうきにととても満足した様子で、小聲で「ありがとう」と伝えることができた。教師は、Cさんが小学生に少しずつ心を開いて「ありがとう」が言えたことの変容に驚いた。これを機会にCさんがこれから自分に自信をもち、自己を発揮しながら、友達関係を深めていってほしいと思う。

幼児たちも小学生との交流を通して、紙飛行機への興味や関心が広がり、同じ場所で楽しさを共有することができた。小学生との交流となると発達段階の違いがあり不安感があったが、小学校の先生との綿密な相談や計画を立てることで、有意義な交流をすることができた。これからも小学校との連携を密にし、目的意識のある交流を続けていき、人とかかわる力を育んでいきたい。

#### <事例2> 「みんな食べたよ」 6月下旬

「先生、トマトが赤くなってきたよ」思わず手に触れてみるEさん。「ほんとだね。色がついてきたね」教師はEさんと顔を見合わす。野菜の生長をEさんだけでなく幼児たちはとても楽しみにしている。野菜畑には、その他にキュウリも実っていることを教師は近くにいた幼児にも伝えた。するとキュウリの周りにも次々と寄ってきて「うわあ、イボイボがいっぱい」と口々に言いながら、自分の手で感触を確かめたり、においをかいだりしている。その後、野菜シルエットクイズをしたり野菜の断面をカードに描いて見せ「これ何かな？」と尋ねてみた。すると「あっ、それピーマンだろ？」Fさんが答える。Aさんも「ピーマンで、まん中に種があるだろ」と言う。「すごいなあ。よくわかったね」と教師は驚いて答える。

また、食べ物列車を赤・黄・緑に分けてパネルに貼っていく。「野菜はからだの調子を整えてくれて、すっきりさせてくれるよ」と伝えると緑の貨物の荷台に野菜のカードを貼っていく幼児たち。Eさんは、ミニトマトとピーマンをさっそく緑のグループに貼って友達にみせる。

その日の給食の時間、野菜の苦手なEさんは、いつものようにピーマンに手をつけないうでいる。しかし、しばらくすると少しずつ箸で割りながらも口へと運ぶ。「Eさん、えらいなあ。食べられよな」と教師は思わず声をかけた。まわりの友達もすかさず「Eさん、すごいでえ」と言う。「だって、からだがすっきりするんだろ」と答えるEさん。給食を全部食べ終えたEさんは「先生見て、みんな食べられたよ」と、とても喜んで食べた。

#### 【省察】

食べ物列車の赤・黄・緑のグループに分けた食育の話に幼児たちは関心をもち、「黄色のなかまはエネルギーになるんじゃない」「力がついてくるよな」などと楽しく話していた。

Eさんは、園で栽培する野菜の成長には関心を示すが食事となると偏食があり、特にピーマンが苦手な給食時もほとんど口にしないう。Eさんの偏食を少しでも直したいと教師は普段から声かけをしていたが、なかなか思うようにななかつた。しかし、栽培物に興味を示している幼児たちに食べ物の話をしていくうちに、そんなに体にいいのなら食べられるかもしれないという気持ちになつたよううで、苦手なピーマンに挑戦することができたと思う。



その日、Eさんの保護者に「お母さん、今日の給食でEさんピーマンやほかの野菜も全部食べられることができたんですよ」そして、Eさん本人も「ぼく、全部食べられたよ」と、嬉しうに言っていたことを伝えると、とても喜んでくれた。保護者は「また、家の方でも食べられるよううに頑張ってみますね」と言ってくれた。そのことにより、食育を進めていくためには、家庭との連携が大切であると再認識した。好き嫌いななく食べることやしつかり体を動かして遊ぶことうで食事の満足感を得ることは、たくましい心と体づくりに繋がることうで考える。そのためには園と家庭が連携を取りながら日常的な信頼関係のある情報交換が重要であることを強く感じた。

#### 5 おわりに

この研究をとおして、幼児一人一人の思いをしつかり受け止め、幼児理解を深めながら幼児の自己発揮を後押しし援助していくことの大切さを学ぶことができた。幼児の発達には、個人差があり、初めから積極的に友達とかかわりを持つ幼児もいれば、友達の様子を見ながら慎重に過ごす幼児もいる。幼児と教師との間に深い信頼関係があれば、少しずつ心の不安感がほぐれ、自分は大切にされ認められているという自信と安心感をもって友達や周りの人に優しくかかわれる。そうした中で自分の大切さや他の人の大切さを認める心が芽生えていくものだと考える。

これからも、幼児が自己発揮し意欲的に人とかかわることうで仲間意識を高め、感性を豊かにしながら、たくましい心と体を育てていくよううで、日々の保育に取り組んでいきたい。

また、食べ物列車を赤・黄・緑に分けてパネルに貼っていく。「野菜はからだの調子を整えてくれて、すっきりさせてくれるよ」と伝えると緑の貨物の荷台に野菜のカードを貼っていく幼児たち。Eさんは、ミニトマトとピーマンをさっそく緑のグループに貼って友達にみせる。

その日の給食の時間、野菜の苦手なEさんは、いつものようにピーマンに手をつけないうでいる。しかし、しばらくすると少しずつ箸で割りながらも口へと運ぶ。「Eさん、えらいなあ。食べられよな」と教師は思わず声をかけた。まわりの友達もすかさず「Eさん、すごいでえ」と言う。「だって、からだがすっきりするんだろ」と答えるEさん。給食を全部食べ終えたEさんは「先生見て、みんな食べられたよ」と、とても喜んで食べた。

#### 【省察】

食べ物列車の赤・黄・緑のグループに分けた食育の話に幼児たちは関心を持ち、「黄色のなかまはエネルギーになるんじゃない」「力がついてくるよな」などと楽しく話していた。

Eさんは、園で栽培する野菜の成長には関心を示すが食事となると偏食があり、特にピーマンが苦手な給食時もほとんど口にしない。Eさんの偏食を少しでも直したいと教師は普段から声かけをしていたが、なかなか思うようにはいかなかった。しかし、栽培物に興味を示している幼児たちに食べ物の話をしていくうちに、そんなに体にいいのなら食べられるかもしれないという気持ちになったようで、苦手なピーマンに挑戦することができたと思う。



その日、Eさんの保護者に「お母さん、今日の給食でEさんピーマンやほかの野菜も全部食べられることができたんですよ」そして、Eさん本人も「ぼく、全部食べられたよ」と、嬉しそうに言っていたことを伝えると、とても喜んでくれた。保護者は「また、家の方でも食べられるように頑張ってみますね」と言ってくれた。そのことにより、食育を進めていくためには、家庭との連携が大切であると再認識した。好き嫌いをなく食べることやしっかり体を動かして遊ぶことで食事の満足感を得ることは、たくましい心と体づくりに繋がると考える。そのためには園と家庭が連携を取りながら日常的な信頼関係のある情報交換が重要であることを強く感じた。

#### 5 おわりに

この研究をとおして、幼児一人一人の思いをしっかり受け止め、幼児理解を深めながら幼児の自己発揮を後押しし援助していくことの大切さを学ぶことができた。幼児の発達には、個人差があり、初めから積極的に友達とかかわりを持つ幼児もいれば、友達の様子を見ながら慎重に過ごす幼児もいる。幼児と教師との間に深い信頼関係があれば、少しずつ心の不安感がほぐれ、自分大切にされ認められているという自信と安心感をもって友達や周りの人に優しくかかわれる。そうした中で自分の大切さや他の人の大切さを認める心が芽生えていくものだと考える。

これからも、幼児が自己発揮し意欲的に人とかかわることで仲間意識を高め、感性を豊かにしながら、たくましい心と体を育ていけるよう、日々の保育に取り組んでいきたい。

# 実生活に生きて働く言語能力を育成する国語科学習指導

—書く活動を通して、自ら考え、豊かに表現する子どもの育成—

三庄小学校 木村 麻紀子

## 1 はじめに

三庄小学校では、平成 28 年度国語部会研究主題「実生活に生きて働く言語能力を育成する国語科学習指導—主体的・協働的にことばを学ぶ単元の構想と展開—」を受け、本校では思考力の育成を中心に主題に迫りたいと考え、研究を進めている。

研究仮説として、①「書く活動の充実」に関する研究仮説

②単元構成、授業づくりに関する研究仮説

③学習評価についての研究仮説

④言語環境全般に関する研究仮説 の 4 項目を設定した。

## 2 研究の目的

知識基盤社会から能力基盤社会への移行は、社会生活の急激な変化からも容易に想像できる。この能力育成の重要性を考える時、県主題にある「実生活に生きて働く言語能力」＝「実践力」育成のためには、資質・能力の中核として位置づけられている「思考力」の育成が重要である。また、「主体的・協働的にことばを学ぶ」という県の副主題に迫るためにも、思考力（主体的・協働的に問題を解決し、更に新たな問いを見いだしていく力）の育成は不可欠である。加えて、主体的な学びができるためには、自らの思考プロセスを内省的に振り返り、学び方を学ばせる経験の繰り返しが必要である。自らの思考プロセスを内省的に振り返るには、思考のプロセスが表現物として目に見え残る「書く活動」が最も適していると捉えている。

そこで今回は、①「書く活動の充実」に関する研究仮説と③学習評価についての研究仮説に基づき授業実践を行い、研究成果を述べる。

## 3 研究の方法

### (1) 「書く活動の充実」に関する研究仮説

#### 仮説①【条件・制限】

条件（制限）のある書く活動を行うことで、子どもの思考力・判断力・表現力はより高まりを見せるであろう。

#### 仮説②【観点・視点・着眼点】

書く活動の観点・視点・着眼点を明確にすることにより、主題のはっきりした文章を書くことができるようになるだろう。

○ 上記の仮説を達成するために、付箋紙を用いて書く活動を工夫した授業研究に取り組み、その成果を検証する。



(2) **学習評価についての研究仮説**

**仮説①【評価・学びの自覚・意欲】**

作成した表現物を振り返り、教師評価と子ども自身の自己評価をし、評価を積み重ねた学習の記録を残していくことにより、自分自身の学びを自覚し、次の言語活動への意欲をもつ子どもになるだろう。

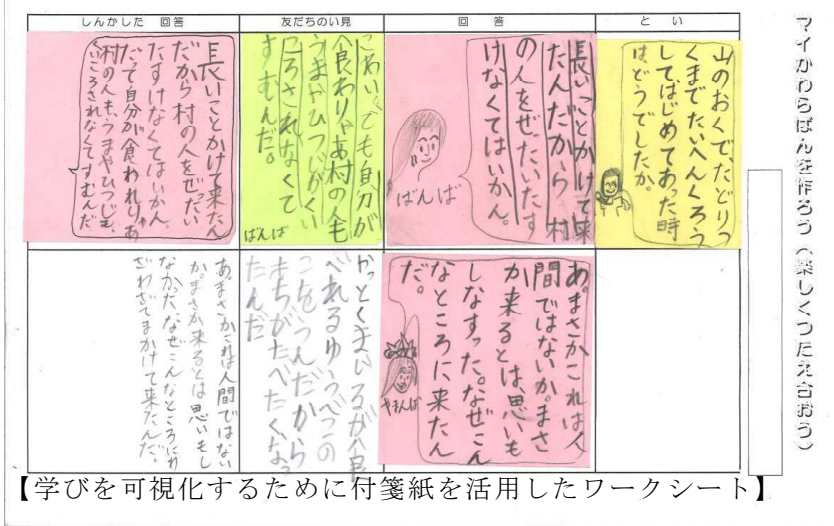
**仮説②【自己評価（能力の伸び）】**

国語能力表（特に書く能力に関して）を子ども自身が自己評価を行える表にして活用することにより、子どもの言語活動への意欲がより高まるだろう。

- 「書くこと」に関して能力表を作成し、それに基づいて子ども自身が自己評価できる振り返りを工夫改善することにした。また、教師自身が評価規準をもち、子どもの作品を評価しておく。個人の能力の伸びや課題が明確になり、指導に活かせると考える。

4 結果と考察

(1) **「書く活動の充実」に関する研究仮説**



- 付箋紙の大きさを調節することにより、限られた紙面の中でよりよい言葉を精選して書く力が身についた。また、字数に応じて文字の大きさを変える必要があり、子どもたちは自分自身で判断しながら書くことができるようになっていった。
- 同一の話題で登場人物にインタビューを行った。視点の違いを付箋紙の色で分けて書かせることによって、誰の意見を書いているか明確にして書くことができた。
- ペア学習や自由交流で付箋紙を活用して、友達から意見をもらったり、言葉のプレゼントをもらったりして、自分の考えを深めていった。

(2) **学習評価についての研究仮説**

- 上記のように自分の意見の深まりを可視化できるワークシートを工夫することにより、自己の変容が自覚化し、また教師も子どもの思考の過程や深まりが分かり、評価に活かすことができた。
- 表現物を評価することにより、次の課題に繋がる。

表現物を評価して、次の課題に活かす。



1/24	1/22	1/10			
① 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	① 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	① 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	① 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	① 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	① 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。
② 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	② 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	② 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	② 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	② 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	② 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。
③ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	③ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	③ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	③ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	③ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	③ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。
④ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	④ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	④ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	④ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	④ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	④ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。
⑤ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑤ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑤ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑤ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑤ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑤ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。
⑥ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑥ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑥ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑥ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑥ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑥ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。
⑦ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑦ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑦ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑦ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑦ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑦ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。
⑧ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑧ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑧ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑧ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑧ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑧ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。
⑨ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑨ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑨ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑨ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑨ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑨ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。
⑩ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑩ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑩ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑩ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑩ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。	⑩ 山崎さんの絵を見て感動して書いてみた。

自己の変容や学びの気づきを振り返りカードに記入していく。

評価規準	C			D		
	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期
登場人物の人柄や話の展開に合わせて想像を広げて、人柄が生き生きと書かれている。【A規準】					○	
登場人物の人柄や話の展開に合わせて想像を広げて、書いている。【A規準】		○		○		
登場人物の人柄や話の展開に合わせて書いている。【B規準】	○					
登場人物の人柄に合わせて書いている。【B規準】						

1学期に、書くことに消極的だった Cさんは、協働的な書く活動の学習を通して、他者の評価や自己評価で自分の変容を自覚していった。2学期に取り組んだ国語科の学習では、自信をもって取り組み、インタビュー記事を考えたり、想像力を働かせて続きの話を書いたり主体的に活動に取り組んだ。

今回の取り組みにより、1学期に行った評価が2学期にどのように伸びていったか明確になった。また、個人の能力の伸びが明らかになると共に、課題も浮き彫りになり、次の学習に活かせることができた。このように表現物の記録を残し、次の学年につなげていくことにより系統的な指導が可能になると考える。

6 おわりに

「書く活動」を通して、子どもたちが見通しをもってねばり強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できつつある。今後は、他者との協働を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの工夫改善、「書く活動」を通して習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程の実現を目指していきたい。これからの研究では、目の前の子ども達に具体的な実践により生きて働く言語能力をつけていきたい。

「自他を大切にし、共に生きる力を育む人権教育の創造」  
～他との豊かなかかわりを通して学び合い、支え合う児童の育成～

芝生小学校 教諭 玉木恵子

## 1 はじめに

本校は、特別支援学級3学級を含め、全校9学級、140名の児童が在籍しており、過疎高齢化の進む三好市の中では急激な人口減少のない地域の一つである。本校は、本年度の文部科学省指定人権教育研究発表会及び、徳島県小学校人権教育研究大会の開催を受け、昨年度（平成27年度）から2か年、全教職員で研修を行い、学年学級の枠を超えて共に人権教育の取組を行ってきた。授業研究を始め、各学年・学級でも様々な実践を行ってきたが、ここでは、学校全体での取組を中心に報告する。

## 2 研究の目的

自他を大切に子どもを育成するために、教育活動全体で豊かなかかわりや体験的活動を意図的に位置づけ、人権に関する知的理解や人権感覚を高め、自尊感情、主体的行動力、コミュニケーション能力を養う指導のあり方を究明する。

## 3 研究の方法

児童の様子の見取りや、児童や保護者、教職員からのアンケート結果などから実態をつかみ、課題を把握し、それを解決していくための重点目標を設定する。そして、効果的な指導内容や指導方法を研究し、教育活動全体を通じて人権教育に取り組む。

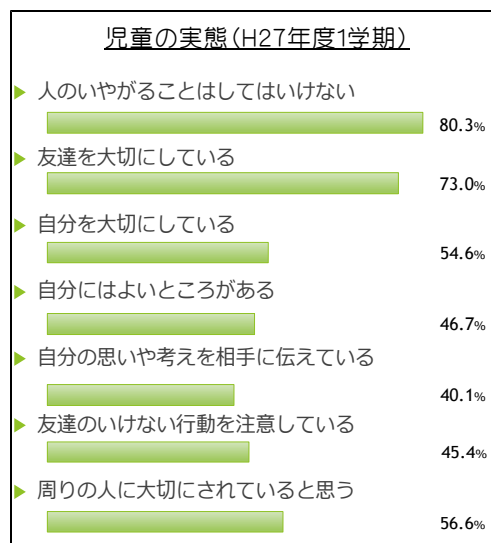
## 4 結果

### (1) 実態の把握と重点目標設定

アンケート結果から、本校児童は、友達の大切さや、善悪の判断など、知的理解を深化させてきてはいるが、それが自己についての肯定感や適切な自己表現等を可能にするコミュニケーション技能にはつながっていないことが感じ取られた。また、自分への自信のなさや、他を思いやり行動する力の希薄さも見受けられた。それとともに、豊かなかかわりを実感し、心温まり通い合う体験不足も懸念された。そこで、

- 自尊感情の育成
- 主体的な行動力の育成
- コミュニケーション能力の育成

という3点を重点目標に設定し、「自他を大切にし、共に生きる力を育む」人権教育に取り組むことにした。また、その力は、子どもたちの生活実態の中から生まれる「豊かなかかわり」によって、高められると考え、



- 教師や子ども相互の「人との学び合い」によるかかわり
  - 家庭を含めた地域社会の「多様な人々や事柄」とのかかわり
  - ふるさとの「文化や歴史、自然等」とのかかわり
- の3つの「かかわり」を大事にしながら研究を進めることにした。

(2) 教師や子ども相互の「人との学び合い」によるかかわりを意識した取組事例

① 人権集会「わくドキタイム」(異学年集団活動)

毎月1回、人権委員会や6年生が中心となり、わくドキ集会を実施してきた。

人権標語の発表を異学年班ごとに行った。高学年が進行し、全員がしっかり発表したり、しっかり聞いたりすることができた。その後、全校児童でジェンカを踊り、最後に交流を深めた。全員が1つのことに汗を流し、共にふれ合うことの楽しさを味わうことができた。また、輪飾りをみんなで協力して作り、それを全体で繋げ、1つの大きな輪を作った。力を合わせることの大切さや絆を感じることもできた集会となった。その他、みのるん誕生集会、手話集会など様々な活動を行い、仲間意識を高めることができた。



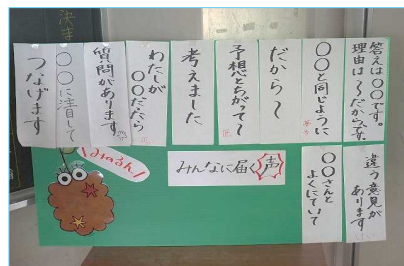
② 考えを共有し、練り上げの場でのホワイトボードの活用

ホワイトボードを積極的に活用して、自分の考えを表現したり、意見の練り上げを行ったり、考えを共有したりする授業に取り組んできた。意見交換が活発になり、ペア学習やグループ学習を取り入れる機会が増え、コミュニケーション能力が高まってきた。協働的な学習や、思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を充実させることは、確かな学力や人権課題の解決につながると思う。



③ 主体的で協働的な学びにつながる話型指導

各教室には、子どもたちが話し合い学習を進める手がかりとして、基本的な話型を掲示しているが、児童の思考の実態に即した話型を追加修正しながら掲示していくようにした。みんなで作ったその話型を使うことで、話したいと思うことがうまく表現できるようになり、それが主体的で協働的な学びにつながっている。



④ 振り返りや行動化を支援する「あゆみノート」の活用

学習を進めたり深めたりする際、それまでに取り組んだ学習を振り返ることが大切である。そこで、そのときの思いや感じ方、考え方を想起することができる「あゆみノート」を作成し、意識させたい価値について観点を選び、自分の思いを綴るようにした。また、主体的な行動に結びつくよう、行動意欲をバロメーターで表すようにさせた。

⑤ よさや頑張りを認め合う校内掲示

学級や校内掲示など、環境を工夫し、体験したときの自己の見方・考え方・感じ方を想起できるようにした。また、自分や友達の良いところを見つけ、教職員も児童の良いところを見つけてカードに書き掲示することにより、自他のよさを見つめたり、温かい言葉に触れたりし、自尊感情の高まりにつなげるようにした。更に、全校児童から案を募集し作られた本校のイメージキャラクター「みのるん」を様々な場面に登場させ、そこに、児童の夢や願いを掲示し、実践化・行動化を図った。



(2) 家庭を含めた地域社会の「多様な人々や事柄」、ふるさとの「文化や歴史、自然等」とのかかわりを意識した取組事例

① 校内避難訓練（町内全消防団との合同訓練）

地域合同避難訓練（高齢者・婦人会・校区自主防災会）

② ラフティングチーム「ザ・リバーフェイス」との交流

③ 先人の功績を学ぶ、三村用水やゆりぬき見学

④ ボランティアによる読み聞かせ

⑤ ゲストティーチャーから学ぶ知恵や技

⑥ 交通安全指導員や生活を見守ってくれる方々とのかかわり など



## 5 考察

児童の実態や課題を明確にし、全教職員で共通理解することで、一人一人に目を向けた指導の徹底を図った。その結果、H28年度に実施したアンケートでは、全ての学年で、人権に対する意識の向上が見られ、特に、自尊感情に関係のある質問事項については、5ポイント前後の伸びが見られた。また、友達への積極的なかかわりについての項目では、10ポイント強の伸びが見られ、友達に進んで声をかけることができる児童が増えてきていることが分かった。様々なかかわりからよりよい人間関係を築いてきたことで、安心感をもてるようになったことや、コミュニケーション能力などの価値的・態度的側面、技能的側面の育成が図られ、行動化につながってきたのであろう。

しかし、ポイントが良い方向に伸びはしたものの、依然として自尊感情が低い児童、行動に移すことに抵抗を感じている児童もまだまだ少なくない。今後とも、指導内容や方法を改善・充実させながら、引き続き豊かなかかわりを基盤にした活動を継続的に推進し、本校児童の人権意識の向上をめざして取り組んでいく必要がある。

## 6 おわりに

平成28年11月9日、本校で研究大会が開催され、県内外の多くの教育関係者の皆様にご覧を見ていただいた。また、様々なアドバイスもいただき、人権教育を更に進めていく上で大変参考になった。この2年間の研究では、どうすれば人権意識の向上につながるのか悩み、試行錯誤しながらの実践だったが、人権教育を深める有意義な機会となった。今後も、教師自身の人権感覚を磨き、児童の思いをしっかりと受け止めながら指導を行っていきたい。

## 研究主題

# 友達のよさを見つけることができる児童の育成をめざして ～道徳（人権）「ともだち」の学習を通して～

池田小学校教諭 上浦大輔

## 1 はじめに

小学3年生は、自分のことから、友達や学級全体のことへ視野や考え方が広がる時期である。そこで、本学級でも友達を大切に、相手のことを考えて思いやりのある行動がとれる子どもの育成を基本に、自分や友達を大切にできる仲間づくりをめざして取り組んできた。また、学校というものは様々な個性をもった児童が集まっている場であり、自分もその中の一人であり、それぞれに長所、短所、得意なこと、苦手なことに違いがあることに気づいてもらいたい。そして、友達のよさを認めていくことは、人権尊重の精神を育み、全ての人が幸せに生きていくことができる社会につながっていくことを知ってほしいと願い、本主題を設定した。

## 2 研究の目的と方法

本学級の児童は、素直で、何事にも真面目に取り組むことができる。個性が豊かで、発言や行動にも一人ひとりに様々な特徴があり活動的であるが、配慮の必要な児童がいる。自分のことはさておき、友達のよいところを見ようとしないので人の言動をきびしく注意する者が何名かいる。そのため、小さな言い争いも多い。

そこで、今回の実践では、ひかりの3年生教材である「ともだち」を扱った。「ともだち」は、いろいろな個性をもった「ともだち」が、20年後それぞれの個性や特徴や願いを生かして自分らしい仕事につき、社会の一員として活躍しているという話である。研究授業では、「ぼく」になってむかしのともだちに声をかける活動や、「ぼく」になって声をかけた時の自分の気持ちを考える活動を通して、友達のよさを見つけていこうとする意欲を高めさせることを目標とした。「ぼく」になってむかしのともだちに声をかける活動では、教師がむかしのともだちのお面をかぶって相手役をすることで、児童に相手意識をもたせて声をかけさせることにつながると考えた。そして、「ぼく」になって、声をかけた時の自分の気持ちを考える活動では、声をかけたときの自分の表情を映像で提示することで、声をかけた時に自分がどのような表情をしていたか気付かせることにつながると考えた。

## 3 研究の実際

### (1) 単元の目標

自分や友達のよさを見つけることができ、誰とでも分け隔てなく接しようとする態度を育てる。

### (2) 指導計画

#### 〔1〕これまでの学習

- ・国語科「自分をしょうかいしよう」・・・1時間

さまざまな観点から自分のことを振り返ることで、自分のよさを見つけ、自尊感情を高める。

〔2〕現在の学習

- ・道徳「ともだち」（ひかり 3年）・・・2時間（本時2／2）

〔3〕これからの学習

- ・学級活動「友達をしょうかいしよう」・・・1時間

友達のよさを見つけ、紹介文を書くことで、人のよいところを見つめて接することの大切さについて考えることができるようにする。

（3）本時の学習

〔1〕目標

友達のよさを見つけていこうとする意欲を高める。

〔2〕普遍的な学習のテーマ「仲間づくり」

〔3〕展開

学習活動	指導上の留意点
1 本時の学習課題をつかむ。	○ 資料に出てくる子どもたちがどのような個性を生かして自分らしい仕事についてのかを確認し、本時の学習の方向づけをする。
「ぼく」になって、むかしのともだちに声をかけよう。	
2 自分が「ぼく」だったら、むかしのともだちにどのように声をかけるか考え、発表する。	○ 「ぼく」の個性を考えて、声をかけることができるようにする。 ○ ワークシートを用意し、考えを表現しやすいようにする。
3 「ぼく」になって、声をかけた時の自分の気持ちを発表する。	○ 「ぼく」になって、声をかけた時の自分の心情を振り返らせ、児童が目標に迫ることができるようにする。
4 本時の学習のまとめをする。	○ 本時の学習の振り返りをさせ、友達のよさを見つけていこうとする意欲を高める。

〔4〕評価

< 価値的・態度的側面 >

- ・友達のよさを見つけていこうとする意欲を高めることができたか。

< 技能的側面 >

- ・資料に出てくるむかしのともだちのよさを見つけることができたか。

4 結果と考察

（1）研究協議より

【「ぼく」になって、むかしのともだちに声をかける活動】

- ・教師がお面をつけて相手役をすると、向かい合うので素直に意見が言えていた。
- ・お面をつけることによって児童の表情もやわらぎ発表しやすくなった。
- ・声かけの時の教師の表情がやさしくて、児童は安心したと思う。
- ・声かけの時、自信がない友達にも励ましの声をかけることができていた。友達同士も肯定的な雰囲気の中で活動できていた。
- ・声かけの後、友達からの拍手に対して笑顔があった。

【「ぼく」になって、声をかけた時の自分の気持ちを考える活動】

- ・授業中の表情を投影することで、授業の振り返りができた。
- ・児童が活動の様子を（自分たちの様子を）リアルタイムで振り返ることができたことがよかった。
- ・表情の共有があったので、そこから本時の目標に向けての方向づけができていた。
- ・「ぼく」として友達に声かけをする様子を全体で見るとは、授業に活気を与えることにつながった。
- ・声をかけたときの自分の表情を映像で提示した時、児童の表情がとてもやわらかく温かい雰囲気だった。
- ・声をかけたときの自分の表情を映像で提示した時、児童がとてもうれしそうだった。
- ・声をかけたときの自分の表情を映像で提示した時、児童の心が温かくなったと思う。



(2) 授業後の児童の感想

- ・わたしは、友だちのよさを見つけると、自分もうれしい気持ちになることが分かりました。
- ・わたしは、友だちのよさを見つけて、声をかけると、自分もえがおになることが分かりました。

(3) 考察

【「ぼく」になって、むかしのともだちに声をかける活動】

- ・教師がむかしのともだちのお面をかぶって相手役をすることで、児童に相手意識をもたせて声をかけさせることにつながったと考える。そして、声かけの時に教師が笑顔で接することで温かい雰囲気が作られ、児童同士が励ましの声をかけたり肯定的な態度で接したりすることにつながったと考える。

【「ぼく」になって、声をかけた時の自分の気持ちを考える活動】

- ・声をかけたときの自分の表情を映像で提示することで、声をかけた時に自分がどのような表情をしていたか気付かせることにつながった。そして、笑顔で声をかけている児童の表情を全体で共有することで、本時の目標に向けての方向づけができ、温かい雰囲気作りにつながったと考える。

5 おわりに

今回の実践を通して、「教材・教具を工夫すること」や「ICTを効果的に活用すること」の大切さを改めて実感した。さらに、道徳（人権）学習をする時には、学級の温かい雰囲気作りが重要であることも再確認できた。今後もさらに研鑽を積み、児童が温かい人間関係の中で楽しく学べるような授業ができるよう、日々の教育に取り組んでいきたい。



# 言語能力に培う教育活動

## — 一次的事ことばの充実と二次的事ことばの獲得を目指して —

政友小学校 教諭 瀧下光子

### 1 はじめに

本校では、学力向上のためにも、人間関係の安定のためにも、具体的思考から抽象的思考への発達の壁である「9歳の壁」を越えさせることが重要であり、そのためには一次的事ことば<sup>1</sup>の充実と二次的事ことば<sup>2</sup>の獲得による言語能力の育成が必須であると考え、体験的言語活動と作文教育を教育活動の根幹に据えて日々の教育に取り組んできた。

本校では伝統的に地域との交流が盛んに行われており、体験活動が充実していた。この体験活動の中で言語活動をしっかり行うことで、場の状況を共有しながら使われる一次的事ことばの充実を図ることにした。

また、体験的言語活動による一次的事ことばの土台の上に二次的事ことばの獲得を図るためには書きことばの習得が必要であると考え、「作文読本」を採用し、これに投稿することで作文を書く機会を増やすことにした。また、ICTを活用した遠隔合同授業で、場の状況に頼らずに自分の考えを説明する力の向上を図った。

### 2 体験的言語活動の充実

#### (1) 茶摘み体験と伊予川芋炊き会



地域の方の指導で茶摘みをさせていただき、製茶した茶葉は秋の伊予川芋炊き会で販売した。指導者との会話、作業をしながらの話や記録の作文、販売時の声かけや宣伝文の作成など、体験に伴う多様な言語活動を組み入れることができた。

\*1 一次的事ことば 心理学者の岡本夏木は、日常の具体的事実について話し手と聞き手の立場を交換しながら行われる対話で用いられることばを「一次的事ことば」と呼んでいる。ことばを発する場を状況の文脈として共有する者同士で交わされる言葉である。場の状況を共有しているので、主述の整った文でなくても意味が伝わるのが、一次的事ことばの特徴である。岡本は、現在の子供たちは「一次的事ことば」の充実がないまま、早期から形式的な「二次的事ことば」への導入が重視されるため、言語世界がきわめて貧困な形だけで終わっていくことを危惧していた。

\*2 二次的事ことば 話し手と聞き手の役割が固定され、ことばの文脈だけで思考内容を表現することばの用法を「二次的事ことば」と呼ぶ。場の状況を共有しない不特定多数の人にも通じることばである。一般に、小学校入学と同時に書きことばの学習が始まるのに合わせて「二次的事ことば」が発達してくると考えられている。岡本夏木は、「9歳の壁」と「二次的事ことば」の獲得には深い関連があると述べている。

## (2) 地域の伝承や歴史の聞き取りと体験



山城は妖怪の郷である。急峻な地形や国境にあったため、子供を危険な場所に近寄せないために妖怪の話がたくさん伝えられたらしい。下岡昭一さんと山城・大歩危妖怪村の皆さんに山城の妖怪話をしていただいた。「なぜ妖怪の話を集めるようになったのですか」という質問には、「山城にはなにもないと言うけれど、こんなにすばらしいものがいっぱいあることを知ってもらいたくて始めました」と答えてくださった。

校区の神社では、氏子が弓で矢を射る「百々手会」が行われている。弓を引く体験は、初めて見る道具の使い方を教わるために、言語活動の宝庫である。

地元の生活改善グループの皆さんには、そば米汁やゆずを使ったお寿司など、伝統食の体験を指導していただいた。保護者も加わり、さまざまな会話をしながら料理をする楽しい時間であった。

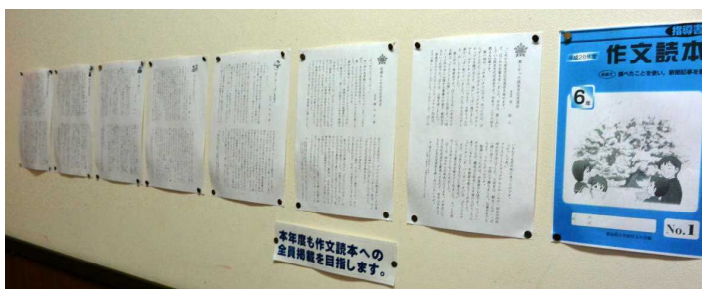
## (3) 伝統文化（人形浄瑠璃）の体験



阿波銀ホール芸術家派遣事業を活用し、浄瑠璃人形遣い勘緑さんに人形遣いを教えてもらった。秋の遠足では阿波十郎兵衛屋敷を訪れ、大勢のお客さんの前で傾城阿波の鳴門の一場面を披露した。人形という具体的な場の状況を共有しながら行われる言語活動は、典型的な一次的事業である。

## 3 書きことばの習得と説明する力

### (1) 作文指導の充実



「作文読本」は、徳島県内の児童作文を掲載する月刊の児童文集である。投稿された作文の中から優秀作品が掲載されている。自分の作文が活字となって県内の同じ学年の児童に読まれるというのは、書くことに対する意欲を大いに高める。この「作

文読本」への全員掲載を目指し、毎週木曜日の朝の活動を「作文タイム」として作文を書き、「作文読本」への投稿を続けた。28年度は、全員が2回掲載という目標を達成している。

## (2) N I E の実践



N I Eとは、新聞を教材として活用したり新聞作りを行ったりする活動の総称である。不特定多数の人に情報を伝える新聞の文体は二次的ことばの典型である。二次的ことばの獲得を目指して、新聞作りにも挑戦した。

## (3) I C T を活用した遠隔合同授業



作文教育では少人数ゆえのきめ細かな指導が成果を上げているが、多様な意見を聞くことができないなど、少人数の弱点も顕著になってきた。そこで、平成27年度から山城小学校、下名小学校とともに文部科学省「人口減少社会におけるICTの活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」の指定を受け、ICTを活用したチェンスクールを形成している。バーチャルではあるが3校で一つの学級が形成され、テレビ会議システムを利用した遠隔合同授業やiPadを使ったグループ学習を実現し、他者に説明する機会の不足を補っている。

## 4 成果

学習したことを条件の異なる他の場面に活用するためには、学習経験を抽象化する必要がある。抽象的思考力が育ったかどうかは、活用力の伸長ぐあいとして見ることができる。本校6年生児童が5年時徳島県学力ステップアップテストで県平均を下回っていた算数活用の正答率は、県平均との差が6ポイント向上して県平均を上回った。活用力の向上は、一次的事実の充実と二次的事実の獲得によって「9歳の壁」を越えさせようという目的がおおむね達成されたことを示している。領域別の正答率で県平均との差が最も大きいのが「書くこと」の16.4ポイントであったのは、書きことばの習得が思考力の発達に大きな影響を及ぼすことを示していると考えられる。

京都府立聾学校の脇中起余子は、著書『9歳の壁を越えるために』の中で、9歳の壁を越えられていない子供の特性として、「自分が知っていることは相手も知っていると思いがちである」ことを指摘している。また、「もし……なら、……」という条件節の意味の理解が不十分なため、「そんなことを言うのなら絶交よ」と「絶交よ」の違いが理解できず、「絶交すると言った」「言わない」のけんかになることが多いともいう。6年時Q-Uアンケートで学級生活満足群が100%に向上した本校児童は、人間関係を築く力の面でも「9歳の壁」を越えてきていると考えられる。

生徒の海外生活や異文化への興味・関心を高めるために  
～若手教員米国派遣交流事業参加の成果を活用して～

三好中学校 教諭 石崎雄一

1 はじめに

平成27年7月21日から8月10日まで、外務省が実施する若手教員米国派遣交流事業に参加し、ユタ州ソルトレイクシティの Elk Meadows Elementary School でティーチングアシスタントとして授業に参加した。この事業の目的は、教員の米国理解の参加を通じた若年層の米国理解の促進、日米交流を通じた日米同盟の強化の2つである。この事業への参加を通して学んだことをどのように生徒に還元していったかについて述べていきたい。

2 研究の目的

事業に参加して学んだことを生徒に伝え、海外での生活や異文化への興味・関心を高め、英語への学習意欲を高めることが目的である。

3 研究の方法と実践

(1) 授業での実践

① 帰国後の授業で米国派遣の研修をもとに授業を実施

英語の授業で今回の米国派遣の研修で学んだことを生徒に伝える機会をとった。自分自身が米国へ行って感じた魅力を伝え、海外へ行くことに対して興味・関心を持たせ、英語学習をさらに頑張りたいと生徒に感じさせることが授業の目標であった。平成27年度の1～3年生、平成28年度の1年生を対象に授業を行った。

授業は次の手順で行った。

1. 導入 (5分)

今回の研修で派遣された小学校についての簡単な説明を聞く。

2. 展開 (35分)

(1) 米国 (ユタ州) の小学校・生活に関するクイズに答える。

(2) 答えを写真や動画とともに確認しながら小学校や生活についての理解を深める。

3. まとめ (10分)

海外に行くことについて必要なことについて確認する。授業の感想を書く。

導入では小学校の校舎や教室の写真を見せた。

展開では説明が単調にならないようにクイズ形式で生徒に答えを予想させながら説明を聞かせた。質問は中学生にとって身近と感じられる内容に絞った。実際のところ日本と違うことばかりではなく同じことも多くあったので、同じところ・違うところの両方を質問の中に織り交ぜた。違うところばかりでなく同じところもあるということに気付かせ、米国への親近感を持てるように説明を行った。生徒たちはクイズの答えを確認しながら、予想が外れていた時は驚いたり、なぜなのかと質問したりして興味関心を持って説明を聞くことができていた。日本と同じ部分・違う部分の両方に驚いている様子であった。

まとめでは、「日本でいるだけでは体験できないさまざまな驚き・発見・出会いによって、自分の視野・可能性が広がる。」「長期間の滞在で、語学力の向上も可能である。」「日本の良さを再発見できる。」などのことを伝え、生徒に感想を書かせた。

## ② ワシントン D.C. について（1年）

1年の教科書にワシントン D.C. が出てきたので研修で訪問した際の写真などをもとに簡単な紹介を行った。ホワイトハウスの説明や、歴史的建物の写真を見てワシントン D.C.がどのような都市であるか理解を深めることができていた。

## ③ 入国審査について（3年）

3年の教科書の発展的な内容として入国審査を取り上げた。入国審査でよく使う会話を生徒たちに練習させる前に、入国審査がどのような形で行われるのかを実際の写真を交えて説明を行った。入国審査でよく聞かれる内容などを説明し、目的を持ってきちんと手続きをして入国するのであれば何も問題がないということを伝えた。

### （2）その他の活用実践例

#### ・米国で購入した学習ポスターを掲示

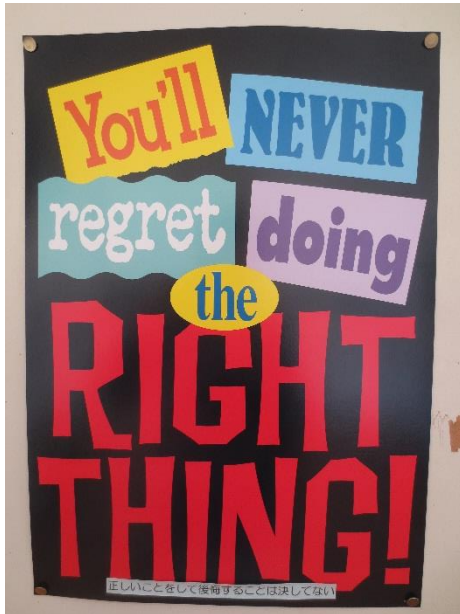
帰国後、米国で購入した学習ポスターを教室や校内に掲示した。米国の小学校6年生に派遣された際に、さまざまな学習ポスターが掲示されており、英語のみならず道德につながるものもあったので、現地で購入した。ポスターは英語学習に関するもの（アルファベット、品詞など）、道徳的な内容のもの（“One thing you can't recycle is wasted time.” “You can always be a better person today than the one you were yesterday.” のようなメッセージ）など、生徒に学習してほしいものや意識してほしいものである。

米国の小学校にも同じようなものが掲示されていることを生徒に伝えると、興味・関心を持ってポスターを見ているようであった。ポスターには日本語での意味も添え、それぞれの単語や文がどのような意味を表しているのかを理解しやすいように配慮した。

品詞のポスターは3年生の廊下に掲示した。少し難しい説明や文を見ながら日本人が英語を学ぶのと同じように米国人も品詞を意識しながら英語を学んでいるということに気付いている生徒もいた。

アルファベットのポスターは1年生の廊下に掲示した。学習したものと少し違う形式で書くアルファベットもあるものの、米国でも日本と同じように4線でアルファベットを書いて学んでいるということを1年生の授業で説明すると、中には少し驚いた生徒もおり、アルファベットが基本となるのは日本の学習者も米国の学習者も同じであるということに気付くことができた。

道徳的な内容のものについては、教室に掲示したり、廊下に掲示したりした。教室に掲示したものの例としては“Respect”と中心にかかれ、その四方に“Show respect to everyone”などのRespectに関わるメッセージが書かれていた。学活の時間にポスターの意味を説明し、日本人が聞いても共感できるものばかりであったので、相手に敬意を示すということが米国でも同じだということに気付くことができていた。特に“Never bully, hit, or hurt others”に関してはneverに強い否定の意味があることを再確認させ、米国の学校でも人を傷つけることが決して許されないということを理解することができた。



#### 4 結果と考察

##### 〈3- (1) について〉

①の授業後に生徒が書いた感想の中には次のようなものがあった。

- ・アメリカの授業もたいへんそうだが、いろいろなことを学べると思った。僕もアメリカへ行ってみたいと思った。(1年男子)
- ・アメリカの学校は日本と違うところがびっくりするほど違っていたが、興味がわいて行ってみたくなった。」(1年女子)
- ・自分の想像とは違うものがいっぱいあった。アメリカに留学したいと思った。(2年女子)
- ・アメリカと日本の文化の差はたくさんの小さな違いだということが分かった。(2年男子)
- ・私も将来アメリカへ行ってみたいのもっと英語を勉強しようと思った。」(3年女子)
- ・「将来アメリカを訪れて日本とは違う文化や習慣を学びたいと思った。」(3年男子)

他の生徒の感想からも生徒一人一人が自分なりに米国について関心を持ち、肯定的な印象を持っているようであった。

##### 〈3- (2) について〉

掲示されたポスターを興味深そうに見ている生徒もおり、書かれた内容について共感している生徒や、内容について質問してくる生徒もいた。

#### 5 おわりに

自分自身、米国へ行ったのは今回が初めてであった。特に、米国の小学校の授業に参加することはなかなかできないので、米国の一小学校を知り、伝えることができる貴重な機会となった。

授業では生徒が日本とは違うところに驚きながら聞いていたことが印象的であった。また、日本と同じ部分もあることに気付き、その点に関しては親近感を持って話を聞いているようであった。中には英語の学習の難しさを感じている生徒もいるが、海外の生活や文化となると普段とは違う気持ちで興味を持ってどの生徒も授業に参加できていた。

今後は、米国だけでなく他の国の文化もいろいろな形で生徒に伝え、海外の生活や文化への興味・関心を高め、英語学習へとつなげていけるように実践していきたい。

## 基礎・基本を定着させる英語教育の実践

三野中学校 教諭 石橋 洋平

### 1 はじめに

本校は生徒数 124 名の小規模校である。三好市の東部に位置し、平野部には田園風景が広がり、豊かな自然環境を有している。生徒たちは、明るく素直で礼儀正しく、学習や部活動、学校行事に一生懸命取り組んでいる。保護者や地域の方々は、本校教育に深い理解を示し、極めて協力的であり、学校に寄せる期待も大きい。そんな期待に応えるべく、本校の教育目標である「知・徳・体の調和のとれた人間性豊かで、人権を尊重しかつ自主、自律、創造性、郷土愛に富むたくましい人間の育成」をめざし、日々の教育実践に取り組んでいる。

### 2 研究の目的

担任をしている 2 年生の生徒は、英語の授業に積極的に参加し、毎日の宿題である自主学習においても、英語の復習を心がけ、英語力をつけようと、まじめに取り組んでいる生徒が多い。その反面、定期テストや実力テストで努力の成果がなかなか点数に結びつかずに、英語学習に意欲的に取り組めない生徒や、英語を学習する上で、何から手をつけたらいいのかが理解できていない生徒もいた。英語が苦手な生徒に、基礎的な学力をつけさせるために、どういった手立てが有効か考え、英文を構成する英単語を覚えたり、英文の構造に慣れたりするために、英単語と基本文を反復して書いたり読んだりして、学習させる必要性を感じ、英単語・連語テストと暗唱テストを実施した。

### 3 研究の実際

今回の実践では、英単語・連語テストを単元毎に、基本文の暗唱テストを基本文が出てくる度に行い、生徒たちの基礎的な英語力向上に努めた。

#### ①英単語・連語テスト

15 問の英単語・連語テストを行うために、テスト前日に生徒に練習用の用紙を渡し、何度も反復して、書いて覚えてくるように伝えた。配布翌日にテストを行い、15 問中 14 問以上の正解で合格とした。正答数が 13 問以下であった生徒は、その日のうちに再テストを行い、再テストでも正答数が 13 問以下であった場合は、間違えた数だけ練習用プリントを持ち帰り、宿題として翌日に提出することとした。

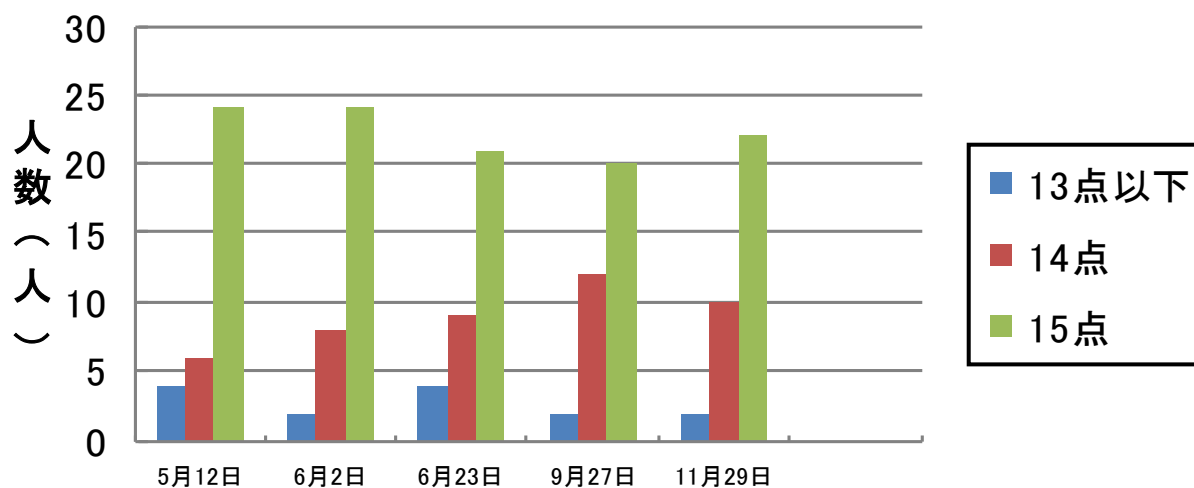
## ②暗唱テスト

各単元の最初の授業で暗唱テストの練習用紙を配布した。練習用紙は、表面は、穴抜きにした英文の基本文と和訳が印刷されており、裏面は基本文の和訳のみが印刷されている。基本文の音読練習をした次の授業日に、暗唱テストを毎回行った。生徒たちは、①何も見ずに、②和訳のみが載っている用紙を見ながら、③穴抜きにした英文と和訳が載っている用紙を見ながら、上記①から③の中から1つを選び、暗唱テストを受けた。全員が①の何も見ずに暗唱することを目標とするが、生徒の習熟度に応じて、②や③でも合格とした。

## 4 結果と考察

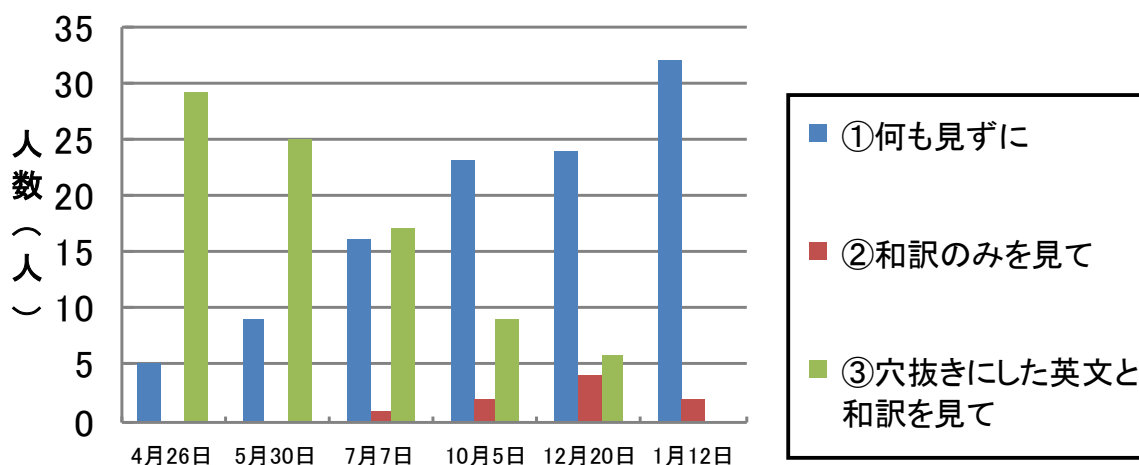
第1回目の単語・連語テストでは、再テストをしても不合格となった生徒が34人中4人いたが、2学期最後の単語・連語テストでは、再テストをして不合格となった生徒は2人のみとなり、単語・連語テストに合格しようと、家庭や学校でテスト勉強をして、テストに臨んだことが結果から分かった。また暗唱テストにおいては、第1回目の暗唱テストでは、何も見ずに暗唱した生徒は、34人中5人のみであったが、3学期最初の暗唱テストでは、その数が32人と増えており、ヒントに頼らずに暗唱しようと意欲的に取り組んだ生徒が大幅に増えた。また、基本文の和訳だけを見て、英文を暗唱する生徒2人を含めて、全員が少ないヒントで暗唱テストを受けようと努力した。何も見ずに暗唱をするより、和訳を見ながら、暗唱テストを受けることで、英文の作り方が分かりやすいと感じている生徒も何人かいることが2学期末に生徒が書いた感想から分かった。

## 単語・連語テスト





## 暗唱テスト



### 5 おわりに

英語が苦手な生徒も事前に勉強をすることで、本番の単語・連語テストで合格点を取ることができ、英語学習に目標を持って取り組むことができるようになった。また、定期テストにも、単語・連語テストで出題された単語や連語が出てくるため、生徒たちも必死で覚えようと意欲的に取り組むことができた。ただ、英語が得意な生徒には、15問の単語・連語テストでは、簡単すぎるといった感想もあり、今後問題数を増やすなど、改善をしていく必要がある。

暗唱テストでは、これまでヒントの練習用紙を見ながら暗唱テストを受けていた生徒も、何も見ずに暗唱をすることができるようになると、次の暗唱テストでも何も見ずに暗唱をしたいと意欲を持って、練習に取り組み始めた生徒が多くいた。また、定期テストや実力テストでは、点数が低い生徒も、暗唱テストに向けて、基本文を何回も書いたり、読んだりして、テストに向けて練習をして、ヒントを見ずに暗唱をすることができた生徒もいた。生徒一人ひとりの暗唱を聞くことで、その場で生徒たちの発音を修正することができ、また生徒たちも、基本文を暗唱することで、英語の文の作り方に慣れる事ができたり、英語の発音に自信を持ったりすることができるようになった。暗唱テストをすることで、英文を覚えて読むことができるようになった生徒は増えたが、全員がその文を正確に書くことができるようになったわけではなく、定期テストや実力テストなどのテストの点数の向上につながっていないので、今後は暗唱テストと共に、基本文を書かせるライティングテストを追加しようと考えている。

# 平成28年度 事業報告

三好教育研究所

## 1 研究主題

『未来を切り拓き、心豊かにたくましく生きる子どもの育成』

## 2 事業

### (1) 調査研究

- ア 教育課程の研究
- イ 複式の特性を生かした学習指導方法の研究
- ウ 情報教育についての研究
- エ 地域の教育力を生かした教育活動の研究
- オ 生徒指導にかかわる諸問題の調査研究
- カ 各種研究会への参加と研究物の収集
- キ 購入図書・DVD等の紹介

### (2) 各種研究会および研修会の開催・共催

- ア 研究所協力委員会・研究推進協議会
  - 第1回 6月24日(金) 第2回 2月22日(水)
- イ 情報教育研修会(小教研情報教育部会と共催)
  - 8月23日(火) 夏季研修会(はくあいセンター)
  - 10月18日(火) 研修会 コンピュータ作品審査等(三好教育センター)
- ウ 複式教育研修会(小教研へき地・複式部会と共催)
  - 8月19日(金) 夏季研修会(馬路小学校)
- エ 人権教育研究会(三好郡市学校人権教育研究大会後援)
  - 11月 2日(水) 就学前・小学校分科会(箸蔵小学校)
  - 10月28日(金) 中学校分科会(東祖谷中学校)
  - 11月24日(木) 高等学校・特別支援学校分科会(辻高等学校)
- オ 新任管理職研修会(三好教育振興協議会共催)
  - 4月14日(木) 「管理職の心得」 倉本淳一教育長
  - 「学校事務について」 三好郡市事務室長
- カ 学校運営研修会—教頭・中堅教員研修会—(三好教育振興協議会共催)
  - 開催日と内容、講師
  - 6月6日(月) 15日(水) 24日(金) 28日(火)
  - 7月1日(金) 5日(火) 11日(月) 15日(金) 27日(火) 28日(水)
  - 8月1日(月) 2日(火)
  - 講義1(2回) 倉本淳一 教育長(三好市)
  - 講義2 小谷千恵 事務室長(池田中)
  - 講義3(2回) 竹内明裕 校長(池田中)
  - 講義4 山田泰弘 校長(山城中)

論文ワークショップ教頭部会(2回) 藤本慎二 校長 (井川中)  
" 教諭部会(2回) 伊丹賢治 校長 (箸蔵小)

(3) 各種研究の委嘱

ア 研究発表校

山城小学校・三好教育研究所

イ 研究協力校・園(29年度発表校)

王地小学校・第2ブロック幼稚園

ウ 委嘱研究員

- ・幼稚園(第2ブロック) 辻幼稚園 加藤 由美 教諭
- ・小学校 1区 三庄小 木村麻紀子 教諭
- 2区 芝生小 玉木 恵子 教諭
- 3区 池田小 上浦 大輔 教諭
- 4区 政友小 瀧下 光子 教諭
- ・中学校 1区 三好中 石崎 雄一 教諭
- 2区 三野中 石橋 洋平 教諭

3 研究成果の発表およびその普及

(1) 三好教育研究発表会

- 日 時 平成28年8月18日(木) 12:50~16:40
- 会 場 三好市池田総合体育館 サブアリーナ
- 参加人数 三好市・三好郡内教職員 226名
- 教育研究所・三好教育会 5名
- 来賓 18名

○研究発表

- ・地域から学び、郷土を愛し、主体的にたくましく生きる児童の育成  
～様々な人とのかかわりや体験活動を通して～  
山城小学校 (発表者 井上 清隆 教諭)
- ・生きる力を育む土曜授業実践の成果と課題  
三好教育研究所 加藤 公夫 研究員

○講演

演 題 「江戸の教育力」  
講 師 東京学芸大学 教授 大石 学 氏

(2) 研究紀要(57集)と研究所報(第97号)の発行(CDによる)

各学校、園に配布・各研究機関に送付

(3) ホームページ等による広報活動

(4) 県内外教育研究所への研究紀要と研究所報の送付

(5) 研究員による研究成果のまとめと報告(県教育委員会へ提出)

歴代委嘱研究員一覧(平成元年～) 幼稚園・小学校

年度	幼稚園	小学校				
	幼稚園	小学校1区	小学校2区	小学校3区	小学校4区	小学校5区
元	国見マチ子(絵堂幼)	藤本政義(王地小)	天竹勉(昼間小)	吉岡弘恵(池田小)	森勝正(河内小)	森本義博(櫟生小)
	斎藤光子(三野幼)	坂野町子(三庄小)	前川順子(辻小)	久保徹(箸蔵小)	小笠健二(大野小)	和田初枝(落合小)
2	国見マチ子(絵堂幼)	藤本政義(王地小)	天竹勉(昼間小)	吉岡弘恵(池田小)	森勝正(河内小)	森本義博(櫟生小)
	斎藤光子(三野幼)	坂野町子(三庄小)	前川順子(辻小)	久保徹(箸蔵小)	小笠健二(大野小)	和田初枝(落合小)
3	山口悦子(増川幼)	小笠松美(王地小)	藤野圭一(足代小)	武内隆史(出合小)	竹野啓治(大和小)	細川文男(櫟生小)
	横田嘉代子(昼間幼)	大瀧和彦(加茂小)	為実敬子(西井川小)	真鍋宏実(馬場小)	篠原聡(下名小)	松村直也(和田小)
4	佐々木隆子(東山幼)	大瀧和彦(加茂小)	為実敬子(西井川小)	武内隆史(出合小)	竹野啓治(大和小)	松村直也(和田小)
	井上淳子(足代幼)	小笠松美(王地小)	藤野圭一(足代小)	真鍋宏実(馬場小)	篠原聡(下名小)	細川文男(櫟生小)
5	岡久尚子(白地幼)	辻宏明(芝生小)	中川糸子(足代小)	坂本武彦(白地小)	田中敬子(上名小)	谷恒二(吾橋小)
	矢野聡子(出合幼)	田岡茂樹(加茂小)	齋藤孝(西井川小)	伊丹賢治(三縄小)	志磨昭子(大和小)	大塚一志(栃之瀬小)
6	岡久尚子(白地幼)	辻宏明(芝生小)	中川糸子(足代小)	坂本武彦(白地小)	志磨昭子(大和小)	大瀧和彦(吾橋小)
	矢野聡子(出合幼)	田岡茂樹(加茂小)	齋藤孝(西井川小)	伊丹賢治(三縄小)	田中敬子(上名小)	大塚一志(栃之瀬小)
7	大久保珠美(池田幼)	松田徳子(王地小)	真鍋宏実(昼間小)	中川法子(池田小)	井後辰哉(政友小)	濱口久弥(吾橋小)
	國金砂恵子(野呂内幼)	中川斉史(三庄小)	土井清子(井内小)	川人成子(三縄小)	峯川郁代(山城小)	森本誠司(落合小)
8	國金砂恵子(川崎幼)	松田徳子(王地小)	真鍋宏実(昼間小)	中川法子(池田小)	井後辰哉(政友小)	濱口久弥(吾橋小)
	大久保珠美(池田幼)	中川斉史(三庄小)	土井清子(井内小)	川人成子(三縄小)	峯川郁代(山城小)	森本誠司(落合小)
9	岡尾千恵(下名幼)	原敏二(三庄小)	中川貴史(昼間小)	篠原晃代(馬路小)	小笠原誠(平野小)	徳善之浩(名頃小)
10	木村恵美子(西岡幼)	野町孝英(芝生小)	石井文子(辻小)	島田晴代(野呂内小)	篠原義正(河内小)	岩崎順子(善徳小)
11	三木香代(西庄幼)	森北直樹(加茂小)	中村瑞穂(足代小)	山下史記(佐野小)	河野通之(大野小)	向井ひろみ(菅生小)
12	渡辺千枝(三野幼)	平田公彦(太刀野山小)	小角昌美(西井川小)	三好美智代(西山小)	谷口政代(下名小)	品川知美(櫟生小)
13	岡本久美(西井川幼)	三橋洋子(西庄小)	今川仁史(東山小)	生藤元(箸蔵小)	三橋泰(落合小)	
14	大西恒子(井内幼)	喜多とよみ(王地小)	細谷加代子(井内小)	近藤直美(池田小)	瀧下光子(西宇小)	
15	山中あけみ(箸蔵幼)	樋口隆則(絵堂小)	加藤公夫(昼間小)	近藤明美(三縄小)	松浦理恵(善徳小)	
16	新居利枝(馬路幼)	松代容子(芝生小)	福田ミカ(辻小)	松下寛興(白地小)	井上清隆(栃之瀬小)	
17	古井智恵子(善徳幼)	武田淳子(三庄小)	佐藤仁美(足代小)	向井ひろみ(馬路小)	山中祐二(大野小)	
18	谷本紀子(大野幼)	平尾佐知子(加茂小)	北川ひとみ(王地小)	渡邊真弓(川崎小)	岡本悟(櫟生小)	
19	佐藤重美(東山幼)	平野貴志(東山小)	豊田昌弘(西井川小)	木内晃(佐野小)	猪子研司(和田小)	
20	鳥首こずえ(加茂幼)	邊見明美(絵堂小)	井原理恵(芝生小)	宮本真吾(西山小)	河野恵子(山城小)	
21	大西照子(西井川幼)	和田光司(西庄小)	小角昌美(井内小)	中妻稔子(箸蔵小)	森祐大(吾橋小)	
22	釈子育香(井内幼)	森幸子(昼間小)	松本珠実(王地小)	永山睦子(池田小)	清重正俊(栃之瀬小)	
23	城尾春菜(池田幼)	小角聡志(加茂小)	平尾昌彦(辻小)	安藤久子(三縄小)	平岡千佳(政友小)	
24	元木真砂代(池田幼)	近藤博美(三庄小)	園尾淑子(芝生小)	神谷美樹(白地小)	岩崎真人(櫟生小)	
25	石井やよい(昼間幼)	大久保智江(足代小)	中瀧由紀(井内小)	石丸美穂(馬路小)	福田浩司(東祖谷小)	
26	田岡あけみ(三庄幼)	大西三千代(昼間小)	木村栄治(王地小)	濱本恭代(川崎小)	喜多芳恵(下名小)	
27	真鍋友子(辻幼)	大西勇貴(加茂小)	藤川美香(西井川小)	新藤茂美(箸蔵小)	長岡鷹太(吾橋小)	
28	加藤由美(辻幼)	木村麻紀子(三庄小)	玉木恵子(芝生小)	上浦大輔(池田小)	瀧下光子(政友小)	

歴代委嘱研究員一覽(平成元年～)

中学校

年度	中 学 校				
	中学校1区	中学校2区	中学校3区	中学校4区	中学校5区
元	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
2	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
3	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	島本富美子(東祖谷中)
4	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	玉木富美子(東祖谷中)
5	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
6	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
7	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
8	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
9	三好康彦(三加茂中)	国友博司(井川中)	伊丹尚子(池田一中)	大西恭司(大野中)	鳥本清(西祖谷中)
10	青山貴幸(三野中)	上田美恵(三好中)	坂本浩江(池田中)	田村裕(山城中)	大谷一幸(東祖谷中)
11	平尾治美(三加茂中)	藤本恒幸(井川中)	尾崎真紀(池田一中)	新見哲也(大野中)	大倉俊之(西祖谷中)
12	宮成万寿美(三野中)	川人勝久(三好中)	内田公生(池田中)	白井正道(山城中)	宮成誠樹(東祖谷中)
13	玉木富美子(三加茂中)	川人祐子(井川中)	西岡ひとみ(池田一中)	板東祥子(西祖谷中)	/
14	辺見俊二(三野中)	入江宏明(三好中)	川人恵美(池田中)	根津道子(東祖谷中)	
15	坂部公章(三加茂中)	山内幸子(井川中)	高田和枝(池田一中)	大谷一幸(山城中)	
16	村上義昭(三野中)	野田圭祐(三好中)	峰友眞弓(池田一中)	安田恵(西祖谷中)	
17	玉木利典(三加茂中)	立花久(井川中)	久保喜昭(池田中)	岡本博一(東祖谷中)	
18	木藤和恵(三好中)	宮浦理恵(三野中)	沖原真紀(西祖谷中)	丸岡美枝(山城中)	
19	藤本智恵(三加茂中)	大石さえ子(井川中)	中川浩幸(池田一中)	ナサーニョ・デネヒー(東祖谷中)	
20	垂水恵子(三好中)	窪田和弘(三野中)			
21			尾嶋麻子(池田中)	山口雄三(山城中)	
22	渡辺仁(三加茂中)	近藤幸(井川中)			
23			常村淳(西祖谷中)	山口義明(東祖谷中)	
24	片山徹(三好中)	小出真理子(三野中)			
25			細川誠治(池田中)	峰友眞弓(山城中)	
26	佐藤篤史(三加茂中)	伊藤憲志(井川中)			
27			芳川未弥(西祖谷中)	岡田祐佳(東祖谷中)	
28	石崎雄一(三好中)	石橋洋平(三野中)			